

茂住祐延断層近傍における歪連続観測結果

Results of continuous crustal strain observation in vicinity of Mozumi-sukenobe fault

浅井 康広^{1*}, 石井 紘¹

ASAI, Yasuhiro^{1*}, ISHII, Hiroshi¹

¹ 東濃地震科学研究所

¹Tono Research Institute of Earthquake Science, ADEP

陸域地下構造フロンティア研究 (Ando, 2007) により掘削された活断層調査坑道 (跡津川断層系の一つである茂住 - 祐延断層を貫く延長 480m、地表下 300m の坑道 ; 例えば Takeuchi et al, 2007) の 2 カ所、それぞれ破碎帯 (断層) の近傍約 100m、坑道床面から深さ 10m に石井式ボアホール歪計 (長さ 113.8 cm、歪計部の直径 6 cm) が埋設設置され観測が行われていた (Ishii et al, 2007)。フロンティア研究としての観測は 2001 年度に終了しているが、その後 2006 年 7 月より東濃地震科研が歪計観測システムを管理、連続観測 (サンプリング間隔 1 分) を継続している。

2006 年 7 月以前の観測では、歪計埋設設置前の初期応力測定とその後の歪観測の結果から、断層近傍の主応力と主歪は、テクトニックな作用よりも活断層の運動が反映されることが判明している (Ishii et al, 2007)。

本講演では、2006 年 7 月以降の観測結果を紹介し、Ishii et al (2007) が示した断層運動を反映した主歪場が現在も観測されているかについての検証を行う。

キーワード: 石井式ボアホール歪計, 現位置応力測定, 歪連続観測, 茂住 - 祐延断層, 活断層近傍観測

Keywords: Ishii-type borehole strainmeter, in-situ stress measurements, continuous strain observation, Mozumi-Sukenobe fault, Observation in vicinity of active fault